

名工小沼播磨守の逸品

所在地：舎人 2-2-14 西門寺



大きさ
総高63.0cm
口径37.7cm

製作年
元禄13年 (1700)



西門寺の赤門

さいもんじはんしょう
西門寺半鐘

■ 西門寺

南北朝時代の^{えいわ}永和3年(1377)に、開山したと伝わる浄土宗寺院です。江戸幕府の将軍が舎人^{たかがり}へ鷹狩^{とくがわじつき}に訪れた記録(『徳川実紀』)があり、西門寺も徳川将軍家とゆかりが深く、三代将軍徳川家光の霊を祀る位牌が伝わっています。

■ 名工小沼播磨守

名工として名高い江戸神田^{いもちじ}の鋳物師小沼播磨守の作品です。小沼氏の祖は、徳川家康から腕を買われた名工で、子孫も鋳物師を家業としました。現在も、大きな法要の時には、美しい鐘の音を鳴り響かせており、その技量がしのべれます。

■ 半鐘に刻まれた「舎人町」

江戸時代、現足立区域はほとんどが農村地帯であり、〇〇村のように村とされる場所ばかりでした。しかし、宿場として栄えていた舎人と千住は町とされました。現存する「舎人町」と記された資料は少なく、貴重な文化財です。



半鐘に刻まれた「舎人町」

文化財豆知識

戦時供出と奇跡の里帰り

第二次世界大戦中の資源不足の中、鐘を溶かして兵器などに転用するため多くの寺から国へ鐘が供出されました。長年親しんだ鐘と別れる際には、寺で供養が営まれたり、記念写真が撮られることもありましたが(右の写真を参照)。

西門寺半鐘も国へ供出され、溶かされたものと思われていましたが、昭和44年(1969)に新潟県糸魚川市の善導寺のもとへわたっていたことがわかり、善導寺のご厚意で奇跡の里帰りを果たしました。



梵鐘供出の記念写真
(山形県新庄市の松巖寺)
©新庄市